

俺の名は古川太一

一般企業で働くへ平々凡々なサラリーマンだ

今日も残業で夜遅くに帰宅し

コンビニで買った惣菜を肴に缶ビールを開けていた

「はあゝあゝ」

まだ一缶も空けてないのに酔いが回ってきた

でもこれで良い、俺は別に酒が飲みたい訳じゃない

ただ俺は酔っぱらいたいだけなんだ

誰もいない真っ暗な自宅に帰ると途端に孤独感に襲われ  
耐えられなくなる

「はあゝ夏姫いゝ会いたいよおゝ」

吉田夏姫、俺の幼馴染で初恋の女性だ

もっとも今は俺の親父と結婚して

古川夏姫だけどな

「はあゝ」

何度も忘れようとしたが未だに忘れられない  
試しに風俗にもいったが途中で萎えてしまい  
行ったのはそれっきりだ

「今日は珍しく星が見えるなあ…」  
俺は缶ビールを片手にベランダに寄りかかる

（あっちだとこんな風にはっきり星が見えるのなんて  
当たり前だったのになー）

俺は今実家を離れてマンションに住んでいる  
二人の夫婦生活なんて見ていられなかったからだ

それから9年経つが一度も二人に顔を見せていない  
電話やメールも忙しいふりをして無視し続けた

女々しいかもしれないが  
夏姫が俺ではなく父を選んだのが許せなかったからだ

当時は強がって二人を祝福した  
それ以外の道が無かったからだ  
頑張って二人の前では良い息子、良い幼馴染を演じたが  
本当は悔しかった、悲しかった、憎かった  
そして情けなかった  
今もそうだ電話を無視して一番苦しんでるのは俺だ

「夏姫の声が、聞きたい…ぐすっ…うう」

やばい、今泣いたら止まらなくなりそうだ…  
堪えるんだ

「何でこうなっちまったんだ…」  
家を出てから何度も口にしてきた言葉だ

何でこうなったかなんてわかってる  
俺がもっと早くに自分の気持ちに向き合わなかったからだ

「ああ！、あの頃に戻れたら…！」  
無駄だと分かっているけど口にしてしまう

「酔い過ぎたかな、明日も早いし寝るか…」  
俺は布団に倒れ込みそのまま泥の様に眠りについた

丁度その頃窓越しに映る夜空では  
一筋の流れ星が燃える様に輝き消えていった――

夏姫

-Rewrite-

「うーん…」

ぼんやりとだが意識がある

気が付くと俺は真っ暗闇な空間を漂っていた  
それでいて暖かな海に揺らされる感覚がある

「これは夢かあ…」

夢の中で夢と気付くのを明晰夢というんだっけ  
そう呑気に納得していると遠くから誰かの声がする

「おーい」

懐かしい声に惹かれ僕はそちらへ流されていく



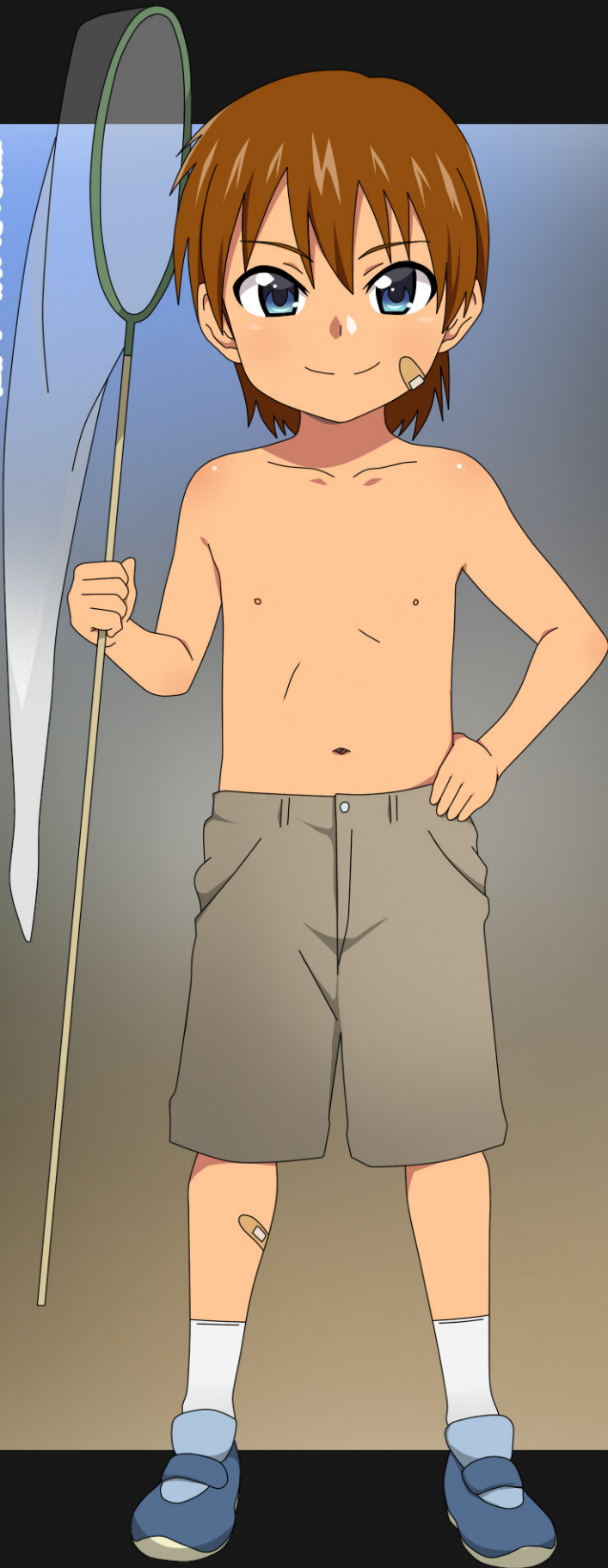
「おいお前!、ここの子か?」  
目の前に現れたのは子供の頃の夏姫だった

「う、うん!、君は誰?、ここは僕の家の庭だよ!?!」  
そうだこれは初めて夏姫と出会った記憶だ

「そうなのか?、良く分かんねーけど蝶々追いかけてたら  
ここにいたんだ、見失っちゃったけどな、ひひ!」

無邪気に笑う夏姫

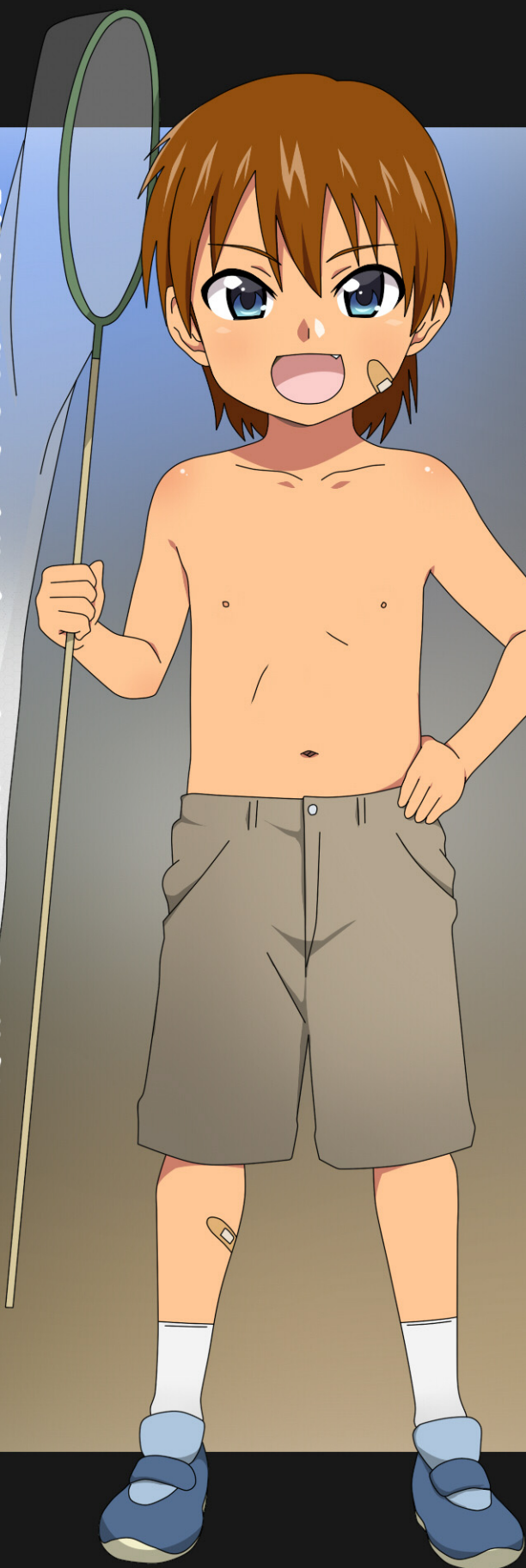
この頃の俺は早くに母亡くしその事に引け目を感じて  
家に引きこもってばかりいた  
そんな俺には夏姫の笑顔は眩しかった



「なあ、お前も一緒にあそぼうぜ！  
家も近いし遊ぶ相手欲しかったんだよ！」  
俺の返事も待たずに手を掴み引っ張っていく

「ぼ、僕いいよお…、外で遊ぶの好きじゃないし  
それに他の子にお母さんがいないからって馬鹿にされちゃうよ」

子供というのは自分と違うものは異分子として排除したがるもので  
良く片親だって馬鹿にされてたっけ



「俺んちも母ちゃんしかいないぞ！それに馬鹿にするやつらなんて  
ボコボコにして泣かしてやりやあいじゃねーか」

「えー!?」  
そのまま小さな俺は引きずられていった

そこでまた俺は無重力に包まれ  
先ほどまでの光景がズームアウトしていく

「また何か聞こえる…」

声の聞こえる方向から光が漏れ  
やがて光に包まれていく

「こらぁー!!、うちの太一に手をだしたのは誰だー!!」



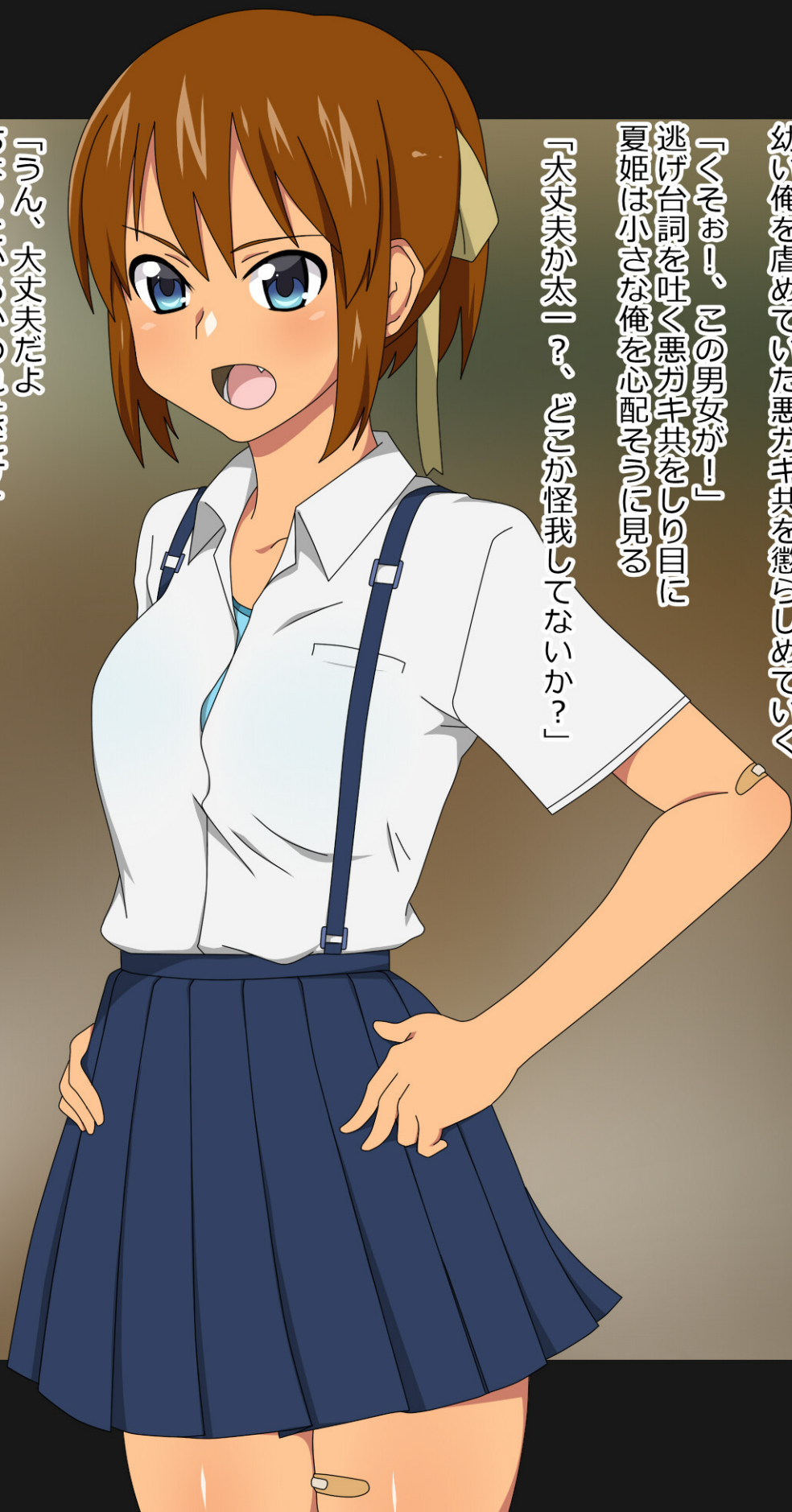
「やべえ！、太一の兄貴がもう来やがった！」  
先ほどより成長した夏姫が鼻息を荒くし  
幼い俺を虐めていた悪ガキ共を懲らしめていく

「くそお！、この男女が！」  
逃げ台詞を吐く悪ガキ共をしり目に  
夏姫は小さな俺を心配そうに見る

「大丈夫か太一？、どこか怪我してないか？」

「うん、大丈夫だよ  
ちよっとからかわれただけ」  
少し気恥ずかしそうに俯く

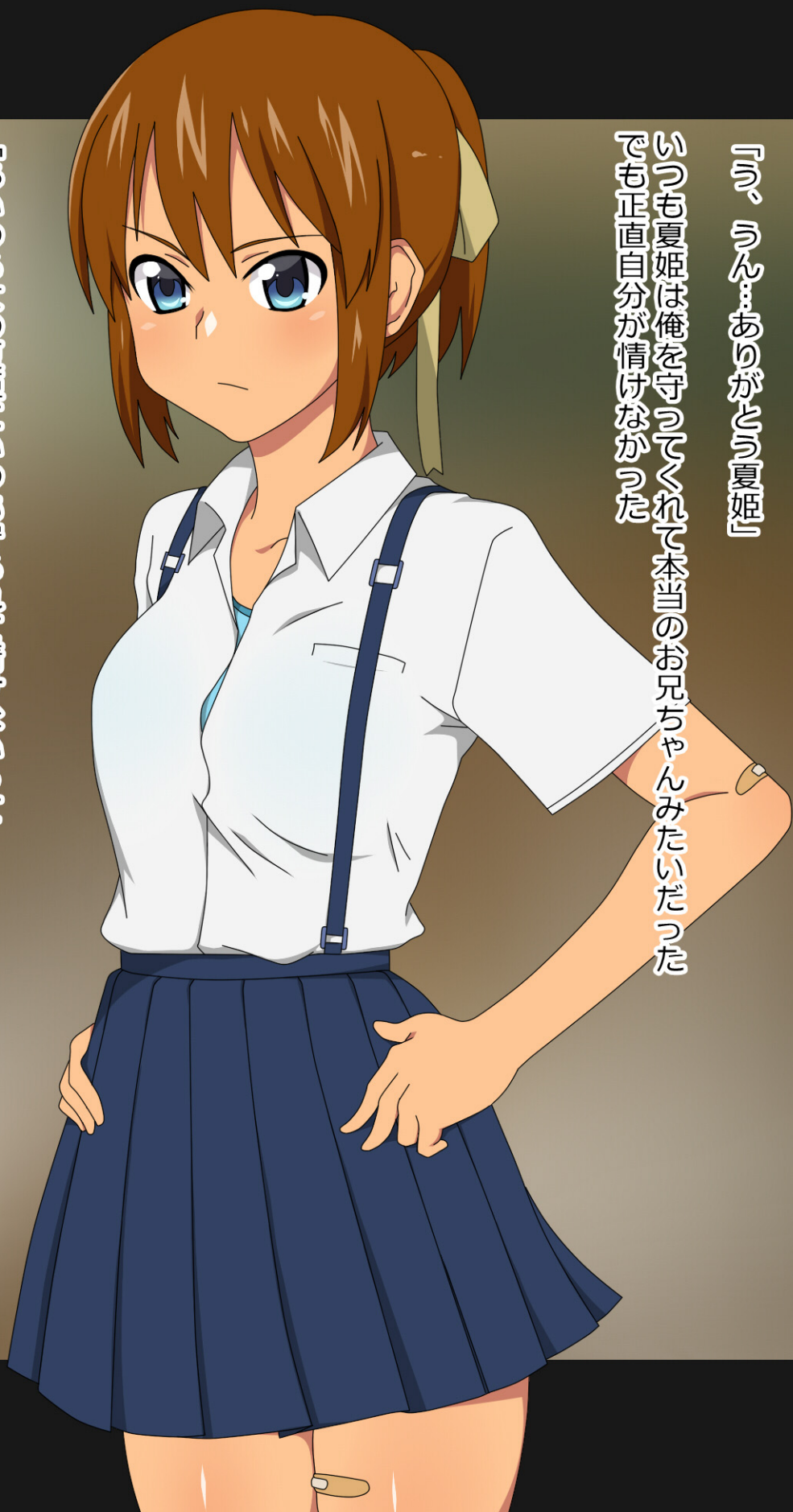
この頃には俺達はすっかり兄弟の様な関係になっており  
周りからも夏姫の弟と認識されていた



「まったく油断も隙もないぜ  
太一、またなんかされそうになったらすぐ呼べよ！」

「う、うん…ありがとう夏姫」

いつも夏姫は俺を守ってくれて本当のお兄ちゃんみたいだった  
でも正直自分が情けなかった



「あいつら女の夏姫にいつも守られて情けないって  
でも確かにその通りだよな…」

「何言ってるんだよ先にいじめてる方が情けねーだろ  
馬鹿の言う事は気にすんな！」



「でも夏姫も僕を助けてるせいで男女とか僕の兄貴とか言われて嫌じゃないの？」

「何で？、俺男と思われても全然気にしないぞ？それに俺お前の兄貴のつもりだし！」  
ふふん胸を張る夏姫



本当にこの頃のお前は  
そこらの男子より男の子してたよな

それで夏姫の母さんが将来を心配して  
髪を伸ばさせてポニーテールにしたんだっけ  
本人は髪が邪魔だって嫌がってたなあ…

「うん、ありがとう、おにいちゃん!」  
照れくさそうに呟く俺

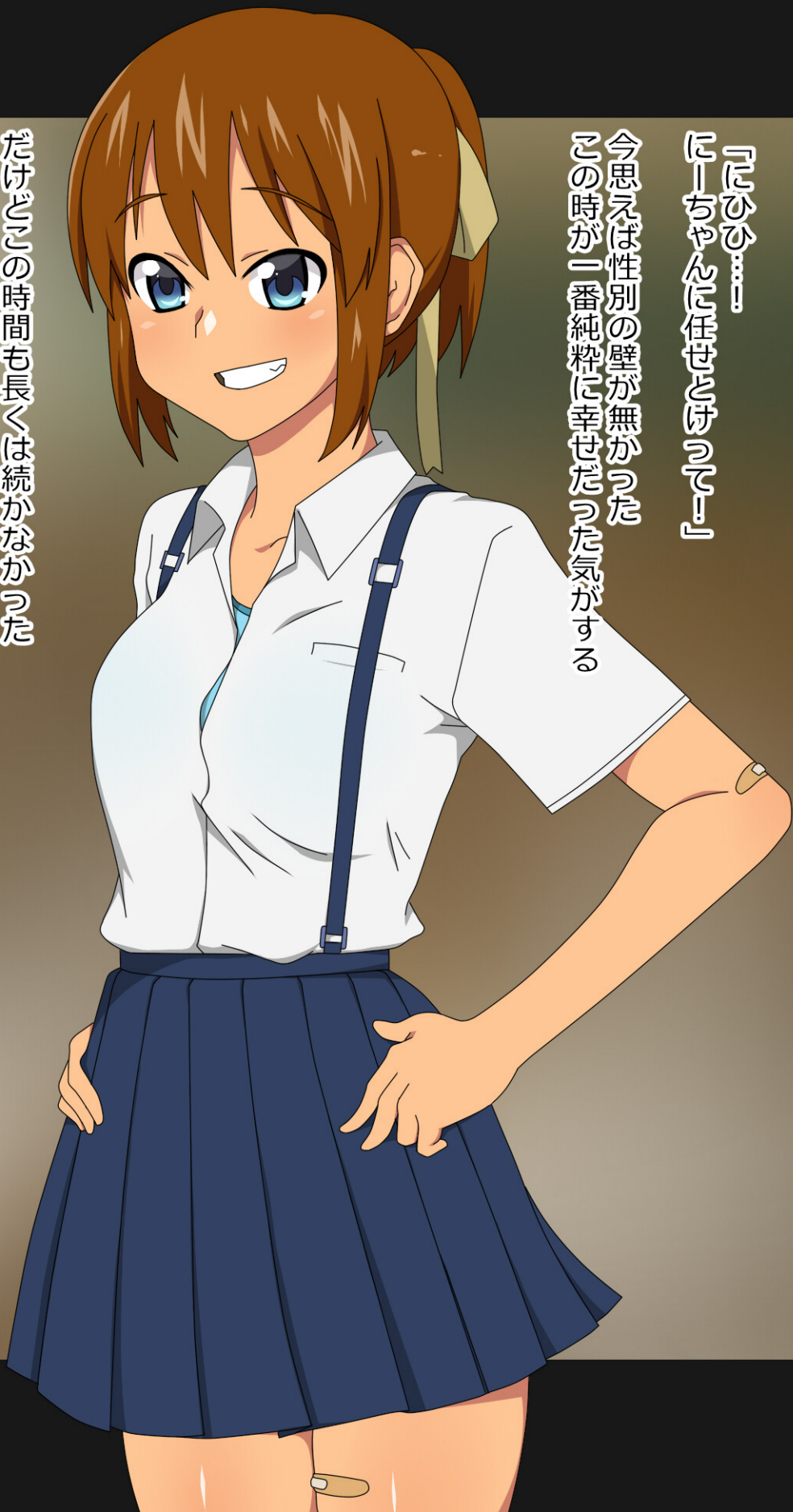
「にひひ…」  
に「ちゃんに任せとけてー!」

今思えば性別の壁が無かった  
この時が一番純粋に幸せだった気がする

だけどこの時間も長くは続かなかった

夏姫は性格に反して  
身体はどんどん女らしく成長し異性として魅力的になっていく

それはいくら兄弟として過ごした時間が長くても  
無視できるものでは無かった





また真っ暗闇に戻される  
「いつまでこの夢は続くんだ…」

何もない空間に放りだされ  
俺は膝を抱えたまま宙で回転し続ける

俺は抵抗もせずそのままくると漂っていると  
大量のモニターが俺を取り囲んだ

「また何か見せられるのか…」

俺は不思議と嫌な予感がした  
目背けてもどこもかしこもモニターだらけだ  
目を閉じてても瞼がモニターになる

脂汗がにじむ  
「止める…止めてくれえ…」

俺は知ってる  
今から何を見せられるのか

モニターが砂嵐から映像に切り替わる  
そこには二人の男女が腕を組んで歩んでいた

そうだ、これは親父と夏姫の結婚式だ…

今でも鮮明に覚えている  
親父に寄り添う花嫁は残酷な程綺麗だった  
どうして隣は俺じゃないのだろう  
どうして俺は二人を見送ってるんだろう  
どうして…





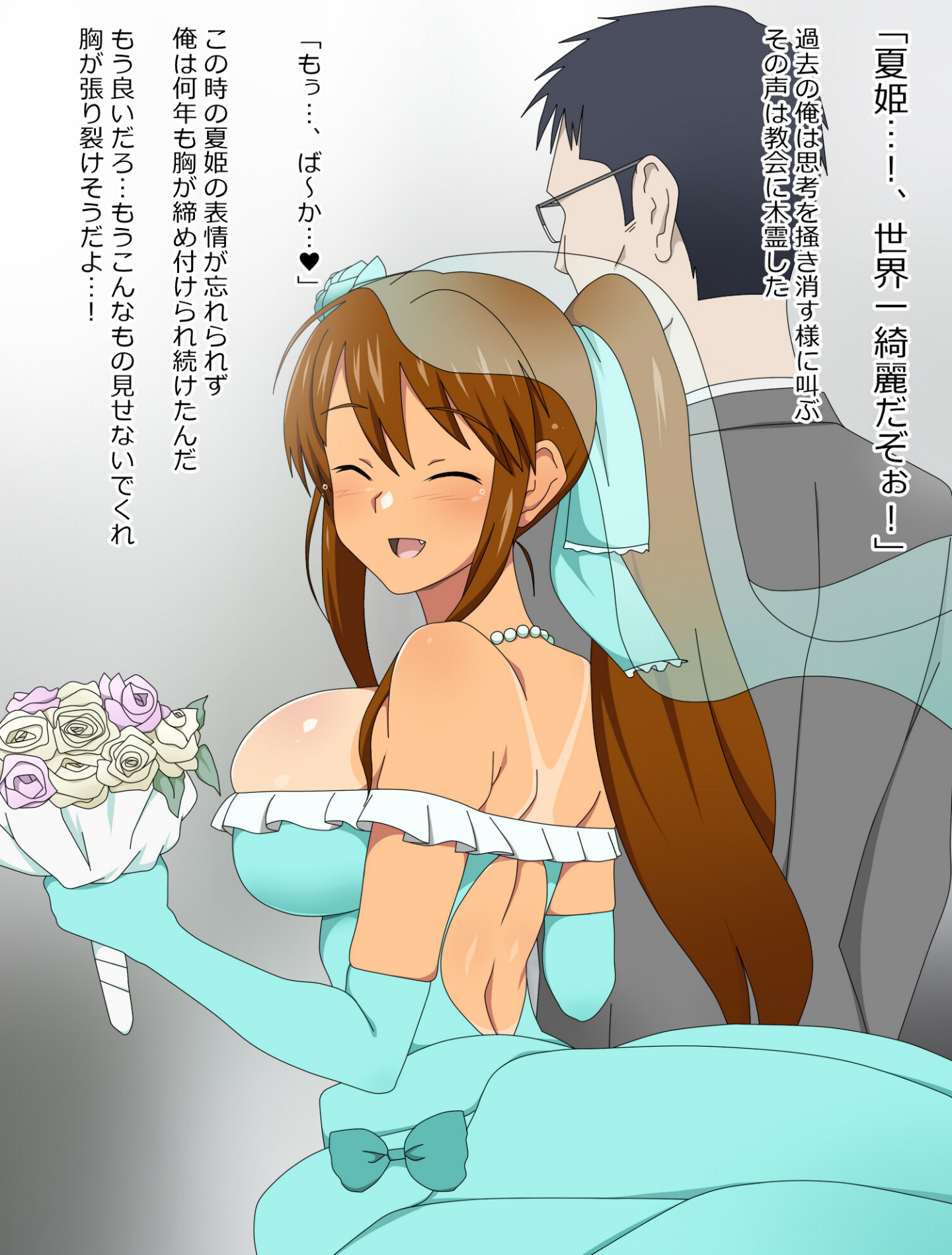
「夏姫…！、世界一綺麗だぞお！」

過去の俺は思考を掻き消す様に叫ぶ  
その声は教会に木霊した

「もう…、ばか…♥」

この時の夏姫の表情が忘れられず  
俺は何年も胸が締め付けられ続けたんだ

もう良いだろ…もうこんなもの見せないでくれ  
胸が張り裂けそうだよ…！



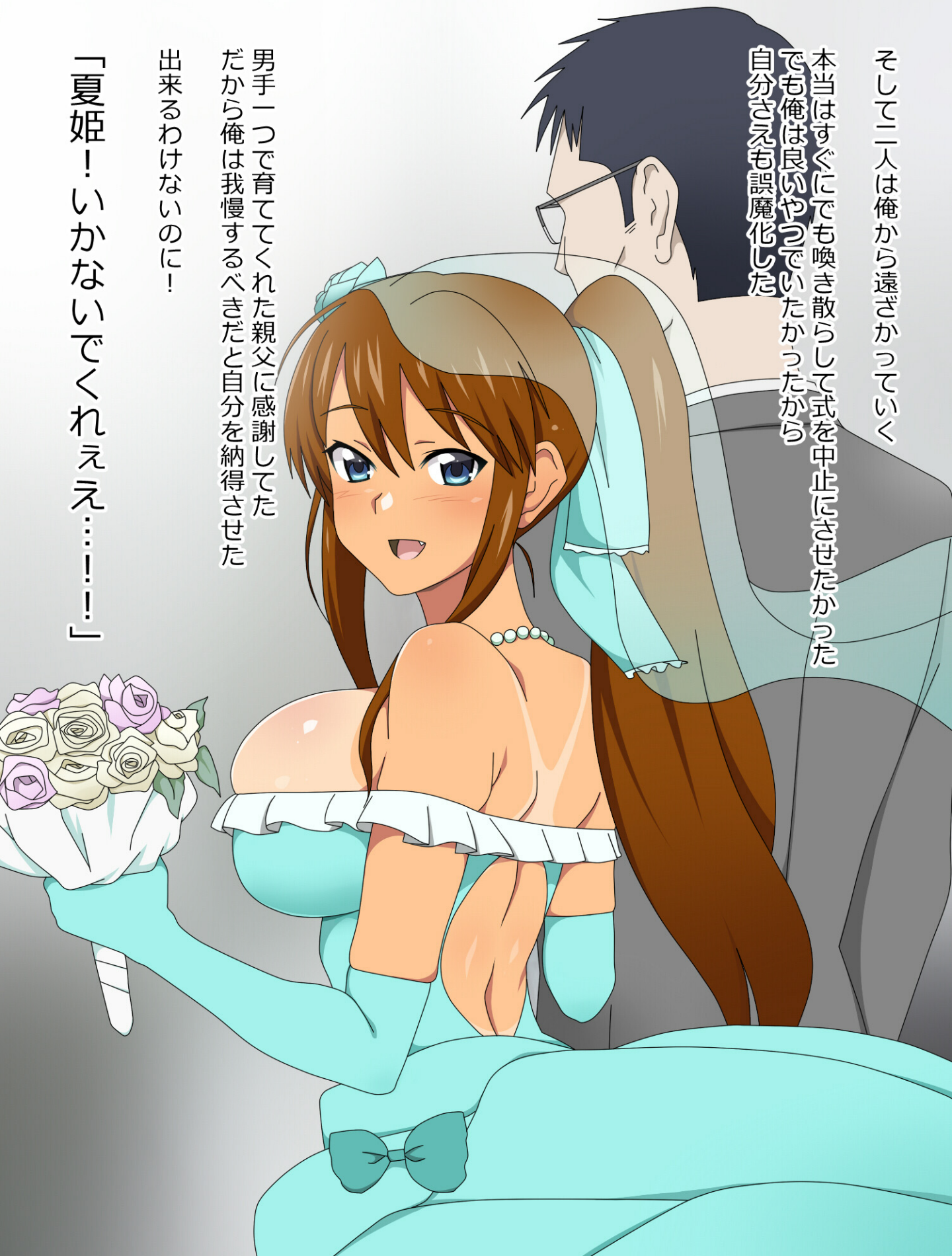
そして二人は俺から遠ざかっていく

本当はすぐにでも喚き散らして式を中止にさせたかった  
でも俺は良いやつでいたかったから  
自分さえも誤魔化した

男手一つで育ててくれた親父に感謝してた  
だから俺は我慢するべきだと自分を納得させた

出来るわけないのに！

「夏姫！ いかないでくれええ……！！」





『5445Pwqr...4N#03...』